１２　ゆかたの着装を通じて伝えるきもの文化の学習に関わる教員研修

薩本　弥生（横浜国立大学）○大矢　幸江（横浜国立大学大学院）
川端　博子（埼玉大学）　斉藤　秀子（山梨県立大学）

１．はじめに

現代は、国際化・情報化の進展によって新しいものへの関心が高まり、自国の伝統文化への関心は低くなっている。特に衣生活に目を向けると日常生活が洋装化し、既製服が普及した今日、きもの文化への若者の関心は低いと思われる。このような背景を受け 2006 年の教育基本法改正では、「伝統と文化を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」等の目標が示された。さらに、これを受け中学の 2008 年、高校の 2009 年の学習指導要領の告示では、「国際社会で活躍する日本人の育成のため、我が国の郷土の伝統と文化を理解し、それを継承、発展させるために、伝統と文化に関する教育の充実を図ること」が求められている。それを受けて、家庭科に関する新学習指導要領において中学校の技術・家庭科の衣生活分野では、「和服の基本的な着装を扱うこともできる」や高等学校の家庭総合では、「衣生活の文化に関心をもたせる」が盛り込まれている。

このような背景のもとに、家庭科の授業で和服の着装をどう取り扱うかが問われている。そして授業で取り扱うためには、まずは教師が関心を抱き、知識や技能を習得することが必要であると考えた。免許状更新講習・県との連携による各種講座・附属中学校の研究会などの機会をとらえて、われわれが取り組んできた教育実践を紹介し、ゆかたの着装を含むきもの文化に関する研修を実施してきたので、その内容と効果について報告する。

２．研究内容・方法

研究メンバーの所属する①横浜国立大学　②埼玉大学　③山梨県立大学で平成 22 年度から継続的に教員研修を行ってきた。以下にその名称と実施年度、参加人数を列記する。

2.1 実施年度と講習名

横浜国立大学：免許状更新講習：H22 年度；19 名，H23 年度；20 名，H24 年度；19 名，H25 年度；11 名，教育デザインセンター連携講座：H23 年度；16 名，附属鎌倉中学校研究発表会：H23 年度；7 名，東京都私学研修会：H25 年度；26 名

埼玉大学：免許状更新講習：H22 年度；15 名，H23 年度；19 名，H24 年度；18 名，H25 年度；19 名，認定講習[被服]：H22 年度；10 名

山梨県立大学：山梨県総合教育センター家庭科授業力向上研修：平成 25 年度；14 名

2.2 講習内容

各大学の実践に相違点もあるが概ね次に示すような内容である。

講義：ゆかたの基礎知識１（歴史・色柄・染・平面構成等）
演習：ミニチュアきものづくり
実習：ゆかたの着装…女性用、男性用示範→参加者の着装→記念撮影、川柳作成→
　たたみ方示範と実習→自己評価
講義：ゆかたの基礎知識２（ゆかたの手入れ・きものの格・TPO）→
　これまで行ってきた授業実践内容および、その効果に関する研究レポートの紹介
総括：川柳の発表と意見交換、テストおよびアンケート

2.3 講習後のアンケート調査内容

講習後に以下の 9 項目について 5 件法で調査を行った。各々①講習前のきもの全般に関する知識、②着つけに関する知識・技能、③講習内容 13 項目に関する興味関心（Fig.1）、④ゆかたの着つけを含む授業の導入意欲、⑤授業で扱いにくい内容の程度（9 項目）、⑦ゆかたを着装した時の気持ち 6 項目、⑧ゆかたやきものに関する興味、⑨「ゆかたがわかる」パンフレットの 21 項目の興味の程度である。なお、5 件法の尺度は（5:非常にそう思う，4:ややそう思う，3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない，1:そう思わない）とし、4 以上を肯定的な回答とした。①１クラスの人数とクラス数，②ゆかたレンタルの利用の有無（2 択式）、③レンタルシステムの指導員の希望、④1 学年が利用するためのレンタル期間、⑤レンタル料の支払い可能性の目安についても調査した。さらに「被服に関する実践や活動内容」，「伝統文化に関わる実践や活動事項」，「実践可能な授業内容」については自由記述で調査した。

３．結果および考察

講習の効果を把握するためのアンケート調査の分析結果を以下に示す。

3.1 受講者の興味関心

講習に関する興味・関心については、ほとんどの項目で「興味がもてた」「ややもてた」と回答し、平均点が 4.0 を超えている（Fig.1）。特に「着つけ」や「ミニチュアきものづくり」は関心が高く、体験学習の効果が感じられる。興味関心の高さをきものに関する知識や技能により高群、低群に分けた 2 群による平均の差の検定で分析した結果、きものの知識量が多いと、「歴史・文化」「授業実践の紹介」「着つけの自己評価」に興味関心が有意に高く、教師のきもの文化への造詣が深いほど実践に意欲的で、生徒にも着つけ技能を習得させたいと思う傾向であることが明らかとなった。

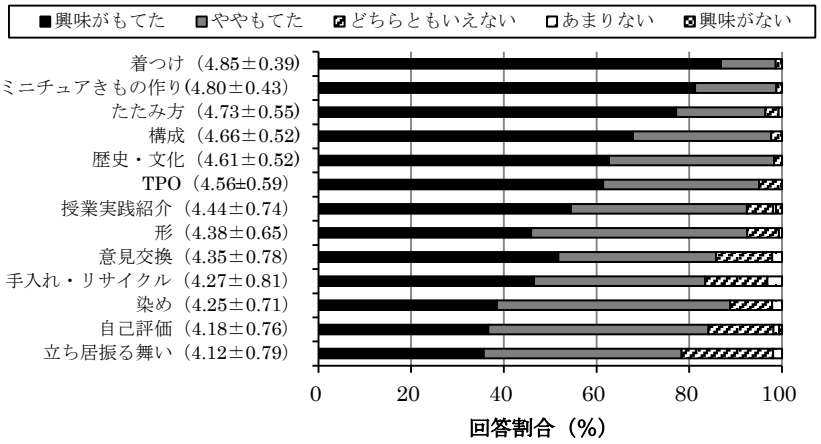

Fig.1　講習内容と興味関心の程度（縦軸のカッコ内は平均点±標準偏差）

3.2 受講者の意識の変化

着つけ前後での意識変化を分析してみると、講習の効果が明らかになった(Fig.2)。「着つけの技能」「和服文化の知識面」ともに講習前は「自信がない」の点数は 3.8 程度だったものが、講習後は 2.8 程度になっており、着つけの技能や知識が「授業で扱いにくいと考える」理由ではなくなった。

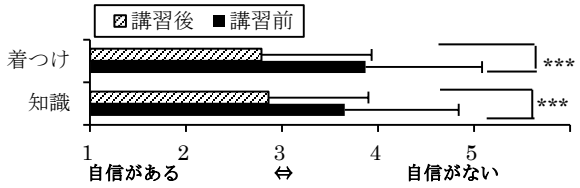

Fig2.　講習前後の自信がない程度

3.3 授業への導入意欲

ゆかたの着つけを授業で扱いたいかについては、平均点が 3.9 程度と関心が高い。特に講習前から知識や技能面が高いと授業への導入意欲は高い。

授業への導入意欲を講義内容への興味・関心項目と関連づけて分析した。Fig.1 に示した講義内容の各項目について「興味がもてた」「ややもてた」を興味高群とし、それ以外を興味低群とすると、「ゆかたの歴史・文化」「実践授業の紹介」「立ち居振る舞い」への興味高群が有意に授業へ導入したいと意欲的であった（Fig.3）。歴史文化や立ち居振る舞いについての内容が授業に役立ちそうと捉え、授業で扱うことへの意欲に関係したと考える。

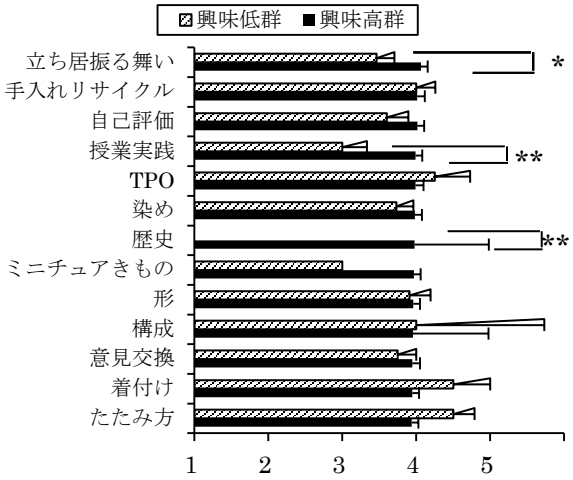

Fig.3　授業への導入意識に影響する項目

授業実践後も着つけ技能に自信がないと授業実践への導入に意欲が低いことが有意となった。ゆかたの「レンタルシステムを利用したい」と答えた群は有意に授業導入に意欲的で、指導員の派遣も希望している。しかし費用負担については消極的で、「ゆかたが準備できない」「アシスタントが不足している」も障壁となっている。しかし、「生徒が興味をもつか」は、興味をもつと考え（平均点 3.9 程度）、教師自身が着つけに関心が高いと生徒も体験的学習への興味が高いと捉えているが分かった。手軽ですぐにも導入できそうな「ミニチュアゆかたづくり」は、平面構成の理解につながるとの理由で関心が高いと言えるであろう。「必要時間数」「クラスの規模」「授業実践例」などその他の項目に関しては、学会発表で報告する。